

学会賞
受賞作および講評

学会賞 受賞作および講評

著作賞

1. 審査対象

著者名：小野真由美

書名：国際退職移住とロングステイツーリズム—マレーシアで暮らす日本人高齢者の民族誌

出版社名：明石書店

出版年：2019年7月25日

2. 講評

本書は、退職した日本人高齢者のマレーシアへの移住や長期滞在を対象として、文化人類学の民族誌的手法を用いて調査を行い、高齢者の国境を越えた日常生活の営みを明らかにしようとしている。第1章では、研究の視座について、本書が移住研究と観光研究の双方の視点からアプローチしていること、包括的な概念としてライフスタイル移住が鍵となっていることが、先行研究のレビューを踏まえて提示されている。第2章では、少子高齢化による世帯構成の変化や老後の生活に対する不安（海外生活の方が安上がり）、さらには生きがいの創出などを背景として、日本においてロングステイツーリズムが登場し、国際退職移住が商品化、市場化されて行った過程を説明している。第3章では、国際退職移住の受手側として、アジア通貨危機以降の経済復興のためにマレーシア政府が観光政策の脈絡において、マレーシア・マイ・セカンドホーム・プログラム（MM2H）を導入し、積極的にマーケティングを行ってきた経緯が紹介されている。

本書では、マレーシアへ国際退職移住は3つの類型に分けられ、続く章でそれぞれ取り上げられている。ひとつ目は日本を拠点として短期的なロングステイツーリズム（長期滞在）を繰り返す「渡り鳥」型、2つ目は国外を生活の拠点として年に1-2回日本に帰国する「定住」型、3つ目は日本から国外に生活の拠点を移す要介護の高齢者による「ケア移住」型である。第4章の「渡り鳥」型では、高齢者は「移住」ではなく、あくまで「長期滞在」を繰り返しているに過ぎないが、ロングステイを啓発し新規の渡航者を世話しているのは、旅行会社ではなく、むしろ先行してロングステイを実践してきた人々が運営する互助組織などである。従来の単純な「ホスト-ゲスト」の関係性ではなく、ゲストが現地ホストに対して積極的に交渉し協働するなかで、ゲストがホストとなる過程が明示されている。第5章の「定住」型では、クアラルンプールが取り上げられ、現地の日本人会や日本大使館に加えて、日本からの結婚移住者や日本人事業者とも連携しながら、先行した日本人退職移住者達自身が、後から来る人々を支援し、MM2Hの促進を図ってきたことが取り上げられている。そこで示されている「日本人コミュニティ」は、かつての「日本人街」のような物理的に人々が集住するコミュニティでもなく、主流（ホスト）社会に対するマイノリティとしてのエスニック・アイデンティティの再生産の場でもなく、加えてインターネットの時代になりネットワークの範囲がクアラルンプールのみならず、マレーシアの他地域や他の国々、日本をも含むことで、越境的なネットワーク型のコミュニティへと変貌していると分析している。

第6章で扱う「ケア移住」型は、日本人退職移住が「労働を目的としない」人の移動であり、かつ移住先での高齢者ケアを担う「労働力を必要とする」移動であるという特徴を有することが指摘されている。現地では、メディカルツーリズムを振興するマレーシア政府の政策と相まって、医療産業と日本人退職移住者の協働によって、日本人専用の介護施設や日本人医師が常駐する医療施設の開設がなされてきた。「消費者」としての移動という点に加えて、医療や介護の従事者（労働力）を必要とするケア型の特徴は際立っている。結論となる第7章では、本書は従来のトランスナショナルリズム論では扱われてこなかった、消費者としての国際移住の市場性を捉えたうえで、国家、国際移動の商品化を担う産業、移動主体の相互作用により、ライフスタイルが生産・再生産されていることを明らかにしたとしている。また、一見トランスナショナルな現象が、実は受入国による滞在者受入の選別や移住者の出身国の年金・社会保障制度などのナショナルな側面と関わっていることなども指摘している。

退職移住に関する研究が進む欧米に対して、日本における研究は未だ途上にあるなかで、日本人退職移住者の現状を明らかにした本書は貴重な研究である。観光研究という観点からはまず、観光と移住の中間領域について取り上げ

ている点が独創性に富んでおり、高く評価できる。観光の形態が多様化する今日、観光研究は常にその定義の見直しを迫られ、研究対象の広がりについても意識せざるを得ない。こうしたなかで、本書は観光研究に新たな視点をもたらしている。本書は民族誌的手法を採用することによって、長期滞在、定住、ケア移住などの多様な形態での移住者に関して詳しいインタビューを実施している。しかし、その視角は移住者「個人」のレベルにとどまらず、国際退職移住の受入を進める政府、民間のビザ業者、移住者の互助組織などの動きも含めた多層的で包括的な分析となっている。特に、移住者自身が運営する互助組織が、新規移住者に対するホストとしての役割をも担いながら、各レベルのステークホルダーと交渉し、協働し、国際退職移住の進展に寄与しているとの分析は斬新である。本書が基づく大きな理論的枠組みはトランスナショナリズム論であるが、上述の消費者としての移住者、ナショナルな側面との関係性などの側面に加えて、本書の中で度々語られているライフスタイル移住、マクロ構造とミクロな主体の間に介在する移住産業などの中間構造に関する議論など、観光研究において参考となる議論も多々展開されている点も評価できる。

本書は、観光研究における新たなチャレンジ、先駆的な試みとして評価できることから、観光学会の「著作賞」に該当すると判断する。

教育啓蒙著作賞

1. 審査対象

著者名：姜 聖俣（単著）

書名：『グローバル・ツーリズム』

出版社：中央経済社

出版年月：2019年3月

2. 講評

本書は、近年日本でも増加が著しい訪日外国人旅行者などの「グローバル・ツーリズム」を中心テーマに据え、それに関わる諸課題について論じた著作である。「はしがき」にあるように、本書は筆者が在籍する大学における「観光ビジネス」の講義ノートを基に執筆されたもので、「観光学を学ぶ学生だけではなく現場で観光に携わる方々により役立つことを願う」と記されている。

本書は全体としては3つの部に分かれており、各部に2～5章を配置し、全10章で構成されている。各章の表題、並びに節立ては、報告書の末尾に目次を記すが、ここでは各章の要点について述べる。第1章は、グローバル・ツーリズムについての概説ともいえる内容であり、国際化とグローバル化の違い、なぜ観光がグローバル・ツーリズムにシフトしていったか、などが論じられている。第2章はツーリズムとツーリズムビジネスの構造について述べられており、グランドツアーからMICEまでの変遷を採り上げている。第3章は、ツーリズムと文化の関係について論じられており、韓流ポップカルチャーを事例に、ツーリズムビジネスの資源としての文化について詳説している。第4章は、観光客の行動を学問的に考察するために必要な要素やアプローチを整理する内容で、観光客の行動や動機の種類や類型化を通して論じている。第5章は、「旅行業」の経営形態の変化について書かれており、トーマスクックからSNSを活用したソーシャル旅行までを採り上げ、その変化を解説している。第6章は、「宿泊業」の経営形態の変化について書かれており、特に日本の宿泊業の特徴について歴史をたどりながら論じている。第7章は、「おもてなし文化」について述べられたもので、「おもてなし」に象徴される日本的サービスの特性と国際的位置づけについて論じられている。第8章は、ツーリズムビジネスにおいて求められる人材について述べられており、特に従業員と顧客との理想的な関係についてスカンジナビア航空や加賀屋を事例に論じている。また第9章では巡礼とテンプルステイについて韓国のテンプルステイを事例に、第10章ではIRを題材に、ツーリズムマネジメントの必要性について論じている。

本書は、観光ビジネスの教科書的書籍としてありがちな業種を順に解説していく形式ではなく、観光ビジネスを中心に据えながらも、随所に学問的なアプローチを活用しながら論じることに成功している。

学会賞 受賞作および講評

例えば、第7章の「おもてなし」に象徴される日本的サービスの理解に当たって、アメリカの文化人類学者エドワード・ホール「ハイコンテクスト文化とローコンテクスト文化」を援用し、日本的サービスをハイコンテクスト・コミュニケーションに位置づけ理解していくなどの論述がなされている。しかも活用される学問的知見は社会学、人類学、マーケティング、民俗学と幅広く、筆者の特に詳しいと思われる韓国の事例が効果的に配置されている。例えば、第3章の韓流ポップカルチャーの事例に対しては、コンテンツだけではなく韓流の文化としての広がりにも目を配りながら論じている。またこの現象を文化消費としてだけではなく、ディアスポラ・ビジネスとして位置付ける視点も提示している。

しかしながら本書は、構成面において若干問題があると感じる。本書は大きくは3つの部に分かれているが、各々のつながりが上手く説明されているとは言えず、第3部の存在がやや唐突に見える。また本書が「現場で観光に携わる方々により役立つことを願う」のならば、本書においてカバーされている観光ビジネスが「旅行業」と「宿泊業」だけであるのは、いささか不足していると言えよう。

以上のような指摘点はあるが、「グローバル・ツーリズム」というまさに今日の重要な現象をテーマにしている点において、学習者の興味に応え、学びのモチベーションを向上させていると考えられる点、観光ビジネスを中心に据えながらも、随所に学問的なアプローチを活用しながら論じている点、さらに広い学問的知見の援用がなされている点は、十分に評価できるものと思われる。

よって、本書は観光学術学会の2020年度「教育啓蒙著作賞」に該当すると考える。

教育啓蒙著作賞

1. 審査対象

編者名：西川克之・岡本亮輔・奈良雅史

書名：フィールドから読み解く観光文化学—「体験」を「研究」にする16章

出版社：ミネルヴァ書房

出版年月：2019年5月

2. 講評

本書は、文化人類学・経営学・都市計画・社会学・文学・文化研究・宗教学など、観光研究の多様な隣接分野の研究者16名が、自身のフィールド調査の成果を、個人的なエピソードをまじえて叙述し、それぞれのアプローチで観光文化に迫ろうとした入門書的な論集である。そのため、取り上げられるテーマも、観光と近代、観光振興と観光地経営、観光資源の真正性、観光空間の創造とパフォーマンス、コミュニティ・ベースド・ツーリズム、農村民泊、文化遺産、K POPと都市、地域開発、中国ムスリムの観光実践、チベット観光の政治性、観光と違法ビジネス、旅行会社とリスク、バックパッキング、社会運動の旅、沖縄台湾間の移動と観光など、基礎から応用まで多岐にわたっている。

本書の最大の魅力は、何よりも各執筆者のフィールドでの「体験」がまず語られ、その体験からどのような問題意識が生まれ、研究につながっていったかが叙述的に論じられている点にある。フィールドでの驚きや戸惑い、研究の個人的な動機などが率直に語られており、読み物としての圧倒的なおもしろさがある。読者として想定される学生は、観光という対象には漠然とした興味があっても、研究を実践するための独自の問題意識をなかなか持てない場合が多いため、そうした学生にとって本書は大きな刺激になると思われる。研究の出発点となる問題意識や問いは誰かが与えてくれるものではないため、まずはフィールドに出てみて、自分の視野をひろげるような新しい体験を試みることの重要性に、多くの読者はあらためて気づかされることになるであろう。観光研究の概念やキーワードについて概説したテキストはすでに数多く出版されているが、「主体的な学び」が大学教育の大きな課題となっているなかで、いま観光学教育の現場で最も必要とされているのは、このように学生自身の問題意識の醸成に寄与するテキストだと考えられる。

また、本書はフィールドでのエピソードを起点に置きながら、分析に際してはさまざまな研究分野の最新のキーワードや理論が援用され、「『体験』を『研究』にする」ための学問的なアプローチが丁寧に示されている。それによって、読者は執筆者のフィールド調査を追体験しながら、具体的な事例に基づいて抽象的・専門的な知識を習得していくことができる構造になっている。学部生にはやや難解な部分も少なくないが、本書のなかで「観光というものの複雑性を損なわない」（第8章、178頁）ことや、「観光現象を矮小化せず、『観光を定義することの難しさ』に真摯に取り組んでいくこと」（第9章、198頁）の必要性が指摘されているように、入門書とはいえ、観光を安易に単純化して理解することの危険性が回避されている点も評価できる。

以上のように、本書は、ただ知識を与えるだけでなく、研究のプロセスの実例を示し、学生自身の探究的な学びの導き手となり得る、今までにない画期的な観光研究のテキストといえる。

したがって、本書は、教育啓蒙著作賞に該当すると考える。